

# 空海の舍利信仰の源流―後七日御修法とスリランカの仏歯供養

内 藤 栄

はじめに

平安時代以降のわが国の舍利信仰において、独自の教義を打ち立て、もつとも多彩な活動を行ったのが真言宗であった。その舍利信仰の核は空海が唐から請来した仏舍利八十粒である。この舍利は東寺の宝蔵に安置されたため、「東寺舍利」の名で呼ばれている。

飛鳥時代から奈良時代において、舍利は基本的に塔に埋納もしくは安置され、塔は釈迦の靈廟として礼拝供養された。塔に舍利を埋納することは、釈迦入滅直後のインドで始まり、広く仏教圏に伝播した。古代の日本もその伝統を受け入れたのであるが、仏舍利八十粒は東寺に五重塔があるにもかかわらず宝蔵に安置された点で、それまでの舍利信仰とは大きく異なっていた。しかも、この舍利は年に一度宮中に運ばれ、国家護持と五穀成就を祈る後七日御修法ごしちのみしほに祀られた。これ以後、舍利は国を守り、人々に豊かさをもたらす宝物として信仰されるようになった。平安時代以降、真言宗を中心に様々な舍利法や宝珠法が創案され、人々は舍利に対して種々の利益を願うようになるが、後七日御修法はその先がけであったと言って良い。

では、空海は後七日御修法に見る舍利信仰をどこで誰から学んだ

のであろうか。さらに、その舍利信仰の淵源はどこにあり、空海に至るまでどのような法脈をたどったのであろうか。

筆者はかつてこの問題を論じたことがある。<sup>(1)</sup>その折は、空海の師恵果が唐の禁裏の内道場において法門寺舍利の供養を行ったことに注目し、法門寺舍利に対する供養法が空海の舍利信仰の源流であると結論付けた。筆者は現在もこの考えは基本的には間違っていないと考えるが、後七日御修法にはそれだけでは説明しきれない要素が存在している。すなわち、約三十年に一度しか行なわれなかった法門寺舍利の奉迎供養に対して後七日御修法は毎年行われ、また法門寺では舍利を塔に埋納するというインド以来の伝統に則しているのに対し、仏舍利八十粒は東寺の宝蔵という建物内に保管されている。この二つの要素を有し、後七日御修法と同様に宮中に舍利を移して供養する舍利信仰を探したところ、スリランカの仏歯供養にたどり着いた。地理的に遠いこともあり、わが国の仏教がスリランカ仏教から影響を受けたことはイメージしにくい。しかし、金剛智(真言宗付法第五祖)と不空(同第六祖)がそれぞれスリランカに渡り、仏舍利の一種である仏歯を拝見していることを考慮すれば(金剛智は仏歯供養の儀式を実見した可能性が高い)、二人の法脈を受け継ぐ空海に彼らが得た仏歯供養の教義や知識が相承されたと考えてもあながち荒

唐ではなからう。

本稿は後七日御修法をめぐり空海の舍利信仰の源流を検討するものである。本稿を通して空海の舍利信仰が世界的な広がりを持つことを指摘できれば幸甚である。なお、本稿の第二章第二節までは、前稿の論旨と重複しているが、論の展開上不可欠のため再説した。

### 一、後七日御修法について

#### (1) 空海請来の舍利

大同元年(八〇六)、空海は唐より帰朝し、舍利、数多くの仏画や經典、道具類などを請来した。請来品の内容について空海が記した『御請来目録』には、舍利及び舍利に関わる道具について次のように見ることができ(大正蔵五五―一〇六四)。

(前略)

#### 道具

- 五宝五鈷金剛杵一口
- 五宝五鈷鈴一口
- 五宝三昧耶杵一口
- 五宝独鈷金剛一口
- 五宝羯磨金剛四口
- 五宝輪一口
- 已上各著三仏舍利一
- 五宝金剛楸四口
- 金銅盤子一口
- 金花銀闍伽蓋四口

#### 右九種一十八事

智之無辺号三仏陀一。覺之無上名三調御一。智無辺故無レ所レ不知。覺無上故方便難レ測。故能種種法門撰化長夜。所謂金剛等者竝皆仏之智法之門。受持頂戴福利無レ極。外摧三滅魔軍一内以調伏煩惱一。觀智之端自レ茲而起。疑南之子不レ可レ不知。

#### 阿闍梨付囑物

仏舍利八十粒<sup>就中金舍利一粒</sup>

刻白檀仏菩薩金剛等像一龕

白縹大曼荼羅尊四百四十七尊

白縹金剛界三昧耶曼荼羅尊一百二十尊

五宝三昧耶金剛一口

金銅鉢子一具二口

牙床子一口

白螺貝一口

右八種物等。本是金剛智阿闍梨從三南天竺国一持來。転付大広智阿闍梨一。広智三蔵又転与青龍阿闍梨一。青龍和尚又転賜空海一。斯乃伝法之印信万生之帰依者也。

(後略)

ここには舍利が二か所に登場する。まず後半の仏舍利八十粒から見ることしよう。これは「阿闍梨付囑物」すなわち恵果から付与された八種の品の一つで、金剛智が南インドで入手したという。金剛智は中インドの生まれとされるが、三十一歳の時に南インドに行き龍樹の弟子である龍智に学んだ。後に中インドやスリランカに遊行し、南インドに戻った後に文殊菩薩を礼拝するために唐に渡った。仏舍利八十粒は金剛智が修学中の南インドにおいて入手したもので

あろう。その後、この舍利は不空・惠果・空海へと相承され、伝法の印信とされた。

そして、引用箇所の前半には舍利を籠めた密教法具六種九口が挙げられている。すなわち、五宝五鈷金剛杵一口・五宝五鈷鈴一口・五宝三昧耶杵一口・五宝独鈷金剛一口・五宝羯磨金剛四口・五宝輪一口である。このうち、五宝三昧耶杵を三鈷杵と考える指摘があり、筆者もその説に賛同する。したがって、この六種の密教法具は五鈷杵・三鈷杵・独鈷杵・五鈷鈴・羯磨・輪宝という、大壇具の主要な法具類であることがわかる。一方、舍利を籠めない法具に五宝金剛楯四口・金銅盤子一口・金花銀闍伽蓋四口の三種九口がある。

『御请来目録』に見える九種十八口の法具は、舍利を籠めた法具と籠めない法具との間に明確な性格の違いがあると思われる。すなわち、舍利を籠めた法具は、五鈷杵・三鈷杵・独鈷杵・五鈷鈴といった導師が直接手に執り、自身や人々の煩惱を摧毁し、魔障から道場を守護するのに用いた道具のほか、輪宝及び羯磨という大壇の中央と四方という要所を守る結界具である。それに対し、舍利が籠められていない法具は、大壇の最外に立て道場の境界を示す四楯や、鈴杵の台である金剛盤、仏の闍伽（水）を盛る供養具である。

法具に舍利を籠める意味について、『陀羅尼集経』卷二「仏説跋折羅功德法相品」に興味深い記述が見える。そこには舍利を籠めた三鈷杵は護法力が増強し、諸外道、欲界天魔、他人を軽侮する心を防ぐと説かれている。<sup>(4)</sup>『御请来目録』に見える舍利を籠めた法具類は、導師が直接手に執って作法を行う法具や壇の主要部を結果する法具であった。それに対し、舍利を籠めていない法具は、四楯のような壇の最も外側に位置する法具、法具の台や供養具といった、導師が

修法において直接触れない、もしくは強力な護法力を必要としない類の法具であったと言うことができる。すなわち、空海は帰国にあたり、主要な法具の全てに舍利を籠めるという計画性を以て大壇具を揃えたのである。空海が密教の修法における舍利の護法力を重視していたことがうかがえる。

## (2) 後七日御修法の目的

承和元年（八三四）十二月十九日、空海は宮中において七日間にわたる密教修法を行うことを提案する上奏文をしたためた。『続遍照発輝性霊集補闕抄』巻九にはその折の上奏文が収録されている。

### 宮中真言院正月御修法奏状 一首

承和元年十二月乙未。大僧都伝燈大法師位空海上奏曰。空海聞。如來說法。有二種趣。一浅略趣。一秘密趣。言浅略趣者。諸經中長行偈頌是也。秘密趣者。諸經中陀羅尼是也。浅略趣者。如下太素本草等經。論說病源一分別藥性上。陀羅尼秘法者。如依方合藥服食除病。若對病人披談方經。无由療痾。必須當病合藥。依方服食乃得消除疾患。保持性命上。然今。所奉講最勝王經但讀其文。空談其義。不曾依法。画像結壇修行。雖聞演說甘露之義。恐闕嘗醍醐之味。伏乞。自今以後。一依經法講經。七日之間。將下扱解法僧二七人沙弥二七人。別莊嚴一室。陳列諸尊像。奠布供具。持誦真言上。然則頭密二趣。契如来之本意。随現當福衆。獲諸尊之悲願。承和元年十二月乙未勅。依請修之。永為恒例。

この中で空海は比喻を以て頭教に対する密教の優位性を説き、頭

教が宮中において年中行事として行っていた御齋会とは別に、宮中に一室を荘厳して諸尊像を安置して供具を並べ、解法僧と沙弥をそれぞれ十四名ずつ選んで真言を持誦することを提案している。そして、この上奏より十日後の承和元年十二月二十九日、次のような太政官符が下された。

太政官符

應<sup>三</sup>毎<sup>レ</sup>年<sup>レ</sup>令<sup>二</sup>修<sup>一</sup>法<sup>一</sup>事

右被<sup>二</sup>從<sup>一</sup>二位行大納言兼皇太子傳藤原朝臣三守宣<sup>二</sup>稱<sup>一</sup>奉<sup>レ</sup>勅。

宜<sup>下</sup>依<sup>二</sup>大僧都伝燈大師師位空海表<sup>一</sup>。毎年宮中金光明会講經<sup>一</sup>

七日間。扱<sup>二</sup>真言宗解法僧<sup>一</sup>二十七人。沙弥<sup>二</sup>二十七人<sup>一</sup>。莊<sup>二</sup>嚴<sup>一</sup>一室<sup>一</sup>。

別令<sup>二</sup>修<sup>一</sup>法<sup>一</sup>同護<sup>二</sup>持<sup>一</sup>國家<sup>一</sup>。共成<sup>中</sup>就<sup>五</sup>穀<sup>上</sup>。

承和元年十二月廿九日

これによれば、毎年宮中において金光明經の講説(御齋会)と同じ期間に真言宗の修法を行うことが認可された。この期間は正月八日から十四日までの七日間であり、前七日(正月一日〜七日)に対して後七日と呼ばれるため、この修法は後七日御修法と称される。右において注目されることは、後七日御修法の目的が国家の護持と五穀の成就と記されている点である。空海は、五穀が稔り人々が満ち足りていることが国家護持の根底にあると考えたのであろう。五穀の成就に不可欠なのは、順調な天候と適量の降雨である。十世紀の頃より、後七日御修法において祈雨法の聖地である室生の龍穴を観想する作法が加わるが、これは後七日御修法が五穀豊穰を祈願するという性格に起因するものと思われる。

さて、宮中における後七日御修法の道場は母屋と庇の二重構造となつている。母屋は東壁に西面して胎藏界曼荼羅を、西壁に東面し

て金剛界曼荼羅を懸け、それぞれの前に大壇を置き、密教法具を配置する。隔年で胎藏界法の年と金剛界法の年が交替し、その年の修法が行われる大壇に仏舍利八十粒を納めた金銅小塔が安置され、阿闍梨はその壇を前にして修法を執り行う。なお、大壇上において宝塔を囲むように配置された法具類は、空海請来の品々が用いられたと推定される(実際今日も後七日御修法において空海請来の金銅五鈷杵・金銅五鈷鈴・金銅金剛盤が使用されている)。先述のように、空海請来の主要な法具には舍利が籠められていた。また、母屋の北壁代には五大尊像を懸け、その西側に孔雀明王像を懸ける。東庇には十二天像が懸けられ、庇の西北隅に増益護摩壇、西側に息災護摩壇、北側東寄りに聖天壇が置かれる。

このように後七日御修法では数多くの尊像がまつられるが、修法の本尊を仏舍利八十粒とする説が、遅くとも観賢(八五三〜九二五)の時代には唱えられていた。<sup>(6)</sup>すなわち、後七日御修法において舍利は両界曼荼羅や五大尊、孔雀明王、十二天などの密教諸尊の中にあつて主尊として認識されている。舍利が釈迦如来という応身仏の遺骨としてよりも、密教体系の中核に位置付けられていることがわかる。

以上見たように、後七日御修法は様々な点で奈良時代までとは異なる舍利観を有している。それをまとめると次の五点になる。

- ①舍利は塔ではなく建物内に安置された。
- ②舍利は年に一度宮中に運ばれ、後七日御修法に用いられた。
- ③後七日御修法の目的は国家護持と五穀成就にあった。
- ④後七日御修法において導師が作法を行う大壇の上には、仏舍利八十粒及び舍利を籠めた密教法具が配置された。

⑤舍利は釈迦の遺骨という本来の意味を離れ、密教体系の中に位置付けられた。

平安時代以降、真言宗を中心に種々の舍利法や宝珠法が開発された。祈願の内容やまつられる尊像などの作法は異なるが、右に見る舍利観がこのような法要においても継承されている例をしばしば見ることが出来る。その意味で後七日御修法はわが国の舍利信仰が大きく変わる分岐点にあったと言つて良いであろう。

では、空海は右に見るような舍利観をどのようにして習得したのであろうか。仏舍利八十粒が師の恵果から相承されたことを考慮すれば、舍利法の儀軌や作法も恵果から伝授されたと考えるべきであろう。その際、恵果の時代の唐において、後七日御修法のように舍利を宮中に運び供養する法会として、法門寺塔の舍利を長安に運び宮中の内道場で供養する儀式が行われていたことが注目される。しかも、恵果は禁裏の内道場において国家のために祈祷を行う供奉僧の一人であり、実際長安において法門寺舍利を迎える役目を担うなど、法門寺舍利と接点があった。

## 二、不空、恵果による法門寺舍利供養

### (1) 法門寺舍利の供養と国家護持

法門寺は唐の都であった長安の西郊、陝西省扶風県にある古刹で、インドのアショーク王が仏舍利を納めるため、この地に塔を建てたという伝承がある。安置されている舍利は仏の指骨とされ、中国において最も篤く信仰された舍利の一つである。元魏二年(四〇五世紀)には法門寺塔の地宮を開いて供養されているが、恒例となるの

は唐代に入ってからである。

唐に入つて最初の法門寺塔の舍利の開示は、貞観五年(六三二)である。『法苑珠林』卷第三十八敬塔篇によれば、この年勅許によつて法門寺塔を開き、人々に舍利の拝見を許したという。ただし、この時は都へ運んだことを伝える記録は見えない。この時の舍利の開示は、盲人がたちまち完治するといった奇跡を起こし、日に数万の人が舍利を見に訪れたという。また、同書はこの時のある古老が法門寺塔は三十年に一度開かれると語つたことが記されている。<sup>(1)</sup>その後記録では唐代において六回法門寺塔が開かれ、舍利が都に運ばれている。法門寺の舍利を都に奉迎した時の様子は、次に引用する『旧唐書』韓愈伝に記されている。

(前略)鳳翔法門寺有護国真身塔<sup>一</sup>。塔内有<sup>二</sup>釈迦文指骨<sup>一</sup>一節<sup>二</sup>。其書本伝法。三十年一開。開則歲豊人泰。十四年正月。上令<sup>下</sup>中使杜英奇押宮人三十人。持<sup>三</sup>香花<sup>一</sup>。赴<sup>三</sup>臨臯<sup>一</sup>。迎<sup>三</sup>仏骨<sup>一</sup>。自<sup>二</sup>光順門<sup>一</sup>入<sup>中</sup>大内<sup>上</sup>。留<sup>禁</sup>中<sup>二</sup>三日<sup>一</sup>。乃送<sup>三</sup>諸寺<sup>一</sup>。王公士庶。奔走捨施。唯恐在<sup>レ</sup>後。百姓有<sup>二</sup>廢業破産<sup>一</sup>。焼<sup>レ</sup>頂灼<sup>レ</sup>臂而求<sup>二</sup>供養<sup>一</sup>者。(後略)

これは元和十四年(八一九)に法門寺舍利が都に迎えられた際、人々が競つて布施を行ったため廢業や破産が起こり、また体の一部を燈明代わりに焼いて供養する者が現われたため、韓愈が憲宗に対して法門寺舍利の奉迎を取り止めるように進言したものである。右で注目すべきことは、法門寺塔が「護国真身塔」と呼ばれていることである。九世紀初頭において、法門寺舍利に対する信仰が護国と結びついていたことを知ることができる。真身とは法・報・応の三身のうち法・報の二身を合わせたもので、真理のはたらきを表す仏

とされる。唐代において、応身仏である釈迦の遺骨を法身に近づける教義があったことがうかがえる。唐代において、「真身舍利」は法門寺舍利を指す固有名詞として使用されている観がある。

韓愈伝で注目されることは、法門寺舍利を迎えた年は豊かになり、人々が安泰になると信じられていたことである。法門寺舎利の供養は、舍利を宮中に運んで供養する点だけでなく、祈願の内容も護国と人々の豊かさや安泰にあった点が、後七日御修法と共通すると言っている。また、一九八七年に行われた法門寺塔の地宮の発掘調査によって、懿宗の治世の咸通十四年（八七三）から翌十五年にかけて奉迎された際の供養具や荘嚴具が発見されたが、その中には金剛界成身会曼荼羅を表した舍利容器や、台座に金剛界諸尊や八大明王などを表した捧真身菩薩像など、密教の教義に基づく荘嚴具を見ることが出来る。空海の時代より七十年ほど遅れるので参考に留めざるを得ないが、舍利と密教尊との習合を認めることができる。

以上のように、法門寺舎利の供養は、後七日御修法ときわめて近似的な性格を有しており、両者の間に何らかの影響関係を想定すべきであろう。その際、空海の師恵果が貞元五年から六年（七八九〜七九〇）にかけ、法門寺舎利の奉迎、供養に携わっていることが注目される。さらに、恵果の師不空も法門寺舎利の奉迎、供養に関わった可能性が高い。

## （2）恵果による法門寺舎利の奉迎

『大唐青龍寺三朝供奉大德行狀』（大正蔵五〇―二九五下）によれば、貞元五年（七八九）恵果は真身を迎える役を担った。

（前略）奉<sub>レ</sub> 勅於<sub>二</sub>右衛龍<sub>一</sub>迎<sub>二</sub>真身<sub>一</sub>入内。貞元六年四月□日。

奉<sub>レ</sub> 勅令<sub>二</sub>僧恵果<sub>一</sub>入内。於<sub>二</sub>長生殿<sub>一</sub>。為<sub>レ</sub>国持念。在<sub>レ</sub>内七十余日。放帰。毎<sub>レ</sub>人賜<sub>二</sub>絹三十匹。茶二十串<sub>一</sub>。（後略）

これによれば、恵果は長安の右衛龍において「真身」を迎え、禁裏に導いたという。真身が法門寺舎利を指すことは先述した。この折の真身舍利奉迎の様子が『冊府元龜』卷五二「帝王部崇釈氏二」に見える。

六年二月乙亥詔葬<sub>二</sub>仏骨於岐陽<sub>一</sub>。初岐陽有<sub>二</sub>仏指骨寸余<sub>一</sub>。葬<sub>二</sub>於無憂王寺<sub>一</sub>或奏請出<sub>レ</sub>之以示<sub>レ</sub>衆。帝乃出<sub>レ</sub>之置<sub>二</sub>於禁中精舎<sub>一</sub>。又送<sub>二</sub>於京師仏寺<sub>一</sub>。傾<sub>レ</sub>都瞻拜施<sub>二</sub>財物<sub>一</sub>類鉅万。是日命<sub>二</sub>中官<sub>一</sub>送<sub>二</sub>岐陽左神作行營節度使鳳翔尹刑部牙迎護葬<sub>一</sub>於旧所<sub>一</sub>。

徳宗は舍利を禁中の精舎（内道場）に置き、さらに都の寺院に移して安置したといい、参詣の人々は都を傾けるほどで、布施の品物は鉅万に及んだという。同書は貞元六年（七九〇）二月に詔によって舍利を岐陽の無憂王寺（法門寺のこと）に埋め戻したと伝えている。

さて、右に引用した『大唐青龍寺三朝供奉大德行狀』によれば、貞元六年四月、勅を受けた恵果が禁裏の内道場において七十日間にわたり国家のために持念したことが見える。『冊府元龜』によれば、この時法門寺舎利は既に内道場を離れ寺に戻っていた。しかし、恵果が行った持念が国家のためであり、場所が内道場であったことを考慮すれば、この記録は恵果による法門寺舎利の供養を伝えている可能性もあろう。恵果が長安の右衛龍において法門寺舎利を出迎える大役を負ったことを考慮すれば、恵果が内道場において舎利の供養に従事した可能性はきわめて高いであろう。

(3) 不空の法門寺舍利の供養

上元元年(七六〇)法門寺舍利の奉迎があった。これは恵果が法門寺舍利を奉迎した貞元五年から六年(七八九~七九〇)の三十年前に当たる。この時期、恵果の師である不空は肅宗のために禁裏の内道場において修法を行っており、不空も法門寺舍利の供養に関与した可能性がある。

『大唐故大德贈司空大弁正広智不空三藏行状』によれば、至徳年中(七五六~七五八)肅宗は安史の乱のために長安を離れ、靈武や鳳翔にあったが、不空は密かに使いを皇帝に送り、安否を尋ねるとともに都を取り戻す策を講じていた。肅宗も不空に密使を送り、秘密法を行うよう請じ、さらに肅宗は不空に命じて禁裏に内道場を建立させて護摩法を行わせ、また長安に戻り乾元年中(七五八~七六〇)には不空より転輪王七宝灌頂を受けた。<sup>(8)</sup>『仏祖統記』巻第四〇は、年紀が明記されていないが、肅宗が詔して法門寺舍利を迎え、禁裏に内道場を建て、沙門に朝夕礼拝させた<sup>(9)</sup>ことが見える。この内道場が不空の造立した内道場と同じものを指すか判断材料が乏しいが、供奉僧として内道場において肅宗のために修法を行っていた不空が、法門寺舍利の供養を行った可能性は高いと言うべきであろう。なお、『大唐聖朝無憂王寺大聖真身宝塔碑銘』によれば、肅宗の時代における舍利の奉迎は上元元年(七六〇)の五月から七月にかけてであった。<sup>(10)</sup>上元元年は肅宗が不空を師として灌頂を受けた直後であり、不空に対する肅宗の信任が最も厚い時期であったと推察することができる。

以上より、不空が法門寺舍利の供養に携わった可能性は高く、その作法や教義は弟子の恵果へと継承され、恵果は貞元時に自身が法

門寺舍利の供養を行った際に実践したものと思われる。その教義はさらに空海へと引き継がれたと推定される。

しかし、法門寺舍利供養と後七日御修法とは、前者が約三十年に一度であるのに対し後者は毎年行われること、また法門寺舍利は塔の地宮に安置されるという古代インド以来の古制に則っているのに対し、後七日御修法に用いられる舍利は建物の中に収蔵された点が異なる。後七日御修法には法門寺舍利供養以外の要素が存在すると考えるべきであろう。後七日御修法のように舍利を宮中に移して供養を行い、さらに右の二つの要素を備えた舍利供養を探すと、スリランカの仏歯供養を挙げることができる。しかも、仏歯供養と後七日御修法とは、不空がスリランカに旅をして仏歯を実見していること、さらに不空の師である金剛智もスリランカに渡り仏歯を拝見し、仏歯供養にも立ち会っている可能性が高いなど接点を有している。

次章ではスリランカの仏歯供養を取り上げ、後七日御修法との類似性を検討することにしよう。

三、スリランカの仏歯供養

(1) 仏歯供養と祈雨

スリランカに仏歯が請来されたのは四世紀のことで、仏歯はアラダプラ、ポロンナルワ、ダンパデニヤと都が変わるたびに常に都に移し置かれ、王権と深いつながりを有してきた。現在はキャンディの仏歯寺に祀られている。

仏歯の供養に関する最古の記録は次の CULAVANSA 37-92-98 である。

In the ninth year of this (King) a Brahman woman brought hither (to Anurādhapura) from the Kalinga country the Tooth Relic of the great Sage (Buddha). In the manner set forth in the Chronicle of the Tooth Relic the Ruler received it with reverence, paid it the highest honours, laid it in an urn of pure crystal, and brought it to the building called Dhammacakka built by Devānampiyatissa on the royal territory. Henceforth this building was the Temple of the Tooth Relic. The King his heart swelling with joy, spent 900000 (kahāpanas) and arranged therewith a great festival for the Tooth Relic. He decreed that it should be brought every year to the Abhayuttaravhāra, and that same sac-  
 rificial ceremonial should be observed.



図1 仏歯精舎跡 (アヌラーダプラ) (筆者撮影)



図2 アバヤギリ大塔 (アヌラーダプラ) (筆者撮影)

これによれば、シリメーガヴァンナ王の三三一年、仏歯がカリンガ国よりバラモンの女性によってスリランカに請来された。王は敬意と最高の名誉を払い、水晶の壺に舍利を納め、王領の中にデーヴァナンピヤティッサ王が建立したダンマチャッカと呼ばれる建物に運んだ。これが仏歯精舎である【図1】。王は心が喜びに溢れ、九十万カハーパナスもの大金を使い仏歯の大祭を行った。王は毎年仏歯をアバユッタラビハーラ（今日のアバヤギリ【図2】、漢名は無畏山精舎）に移し、献身的な祭典を行うように命じたという。

シリメーガヴァンナ王の時代に、仏歯精舎から毎年仏歯をアバユッタラビハーラに移し法要を行うことが始められたが、この様子を  
 実見した中国の法顕（三三七～四二二）は『高僧法顕伝』（大正蔵五一  
 一八六四下～八六五上）において仏歯供養を次のように記録している。

（前略）王於三城北跡上二起三塔一。高四十丈。金銀莊校衆宝合  
 成。塔辺復起二僧伽藍。名三無畏一。山有三五千僧一。（中略）城  
 中又起三仏歯精舎。皆七宝作。王淨三修梵行一。城内人敬信之情  
 亦篤。其国立治已来無レ有二饑喪荒乱一。（中略）仏歯常以三三月  
 中一出レ之。未レ出前十日。王莊三校大象一。使一弁説人著三衣  
 服一騎三象上二擊レ鼓唱言上。菩薩從三三阿僧祇劫一作行不レ惜三身  
 命一。以三国城妻子及桃眼一与レ人割レ肉貿レ鵠截レ頭布施投身餓虎  
 不レ悋三髓腦一。如レ是種種苦行為三衆生一故成仏。在世四十五年  
 説法教化。令三不安者安。不度者度一。衆生縁尽乃般泥洹。泥洹  
 已来一千四百九十七歳。世間眼滅衆生長悲。却後十日仏歯当  
 出至三無畏山精舎一。国内道俗欲レ殖レ福者。各各平三治道路一嚴  
 飾巷陌一。弁三衆華香供養之具一。如レ是唱已王便夾レ道両辺作  
 菩薩五百身已来種種変現一。或作三須大拏一。或作三睽変一。或作三

象王<sup>一</sup>。或作<sup>二</sup>鹿馬<sup>一</sup>。如<sup>レ</sup>是形像皆彩画莊校。状如<sup>二</sup>生人<sup>一</sup>。然後  
 仏齒乃出中道而行。随<sup>レ</sup>路供養到<sup>二</sup>無畏精舎<sup>一</sup>・仏堂上道俗雲集燒  
 香然燈。種種法事昼夜不<sup>レ</sup>息。滿<sup>二</sup>九十日<sup>一</sup>乃還<sup>二</sup>城内精舎<sup>一</sup>。(後  
 略)

引用箇所の前半部によれば、王は城の北に大塔と僧のための寺院  
 を作り「無畏」と名付けた。また、城中に七宝で飾られた仏齒精舎  
 を作り、王はここで梵行を淨修し、城内の人々は仏齒を篤く崇敬し  
 た。仏齒の功德によりこの国は建国以来飢饉・喪(死)・荒れ(不  
 作)・世の乱れがないという。そして、後半部分では仏齒供養の様子  
 が詳述される。すなわち、仏齒は毎年三月に仏齒精舎から運び出さ  
 れるが、その十日前に王の服を着た一人の弁士を美しく飾った大象  
 に乗せ、鼓を打って菩薩を称える言葉を唱えさせる。そして、仏齒  
 は無畏山精舎へと運ばれるが、福を殖やしたい人々は道を平らに整  
 え、あるいは飾り、花や香などの供具を供える。王は道の両側に菩



図3 象の背にのり市中を進む仏齒(キャンディ・ペ  
 ラヘラ祭) 仏齒供養の伝統は今日もスリランカの  
 各地で行なわれているペラヘラ祭に継承されている。  
 (筆者撮影)

薩が種々に変化した姿、あるいは動物の形などを作り、仏齒が無畏  
 山精舎に至ると人々は雲集して焼香・燃燈供養し、種々の仏事は昼  
 夜途切れることなく続く。九十日を迎えると仏齒は仏齒精舎へと戻  
 るという【図3】。

これより仏齒供養は王が主宰者となって行う行事であり、仏齒の  
 存在はスリランカに平安と豊作、人々に長寿や福をもたらすと信仰  
 されていたことがわかる。これは法門寺舍利と仏舍利八十粒に期待  
 された効験と通じ、しかも国王が舍利を奉迎し供養する点も共通す  
 る。雨季と乾季があり、アヌラーダプラやポロンナルワなどの古都  
 がある島の北部は年間を通じて雨量が少ないスリランカでは、王た  
 ちはしばしば巨大な溜池を築造するなど水の確保に努めた。仏齒を  
 供養し雨を祈ることは、スリランカの王の重要な務めであった。実  
 際、仏齒供養の最中に降雨があったことを伝える記録をCULAVAMSAに見ることが出来る。たとえば、同書74-224-233には、

The Monarch himself arrayed with all his ornaments, mounted  
 his favourite, beautiful elephant which was hung with coverings  
 of gold, and surround by many dignitaries, who rode their steeds,  
 he went forth with great pomp from the splendid town, betook  
 himself to the sacred Tooth Relic and to the glorious Bowl Relic,  
 revered them in worthy fashion with hands folded on the  
 brow, and while offering to them with his own hands sweet-  
 smelling flowers he went on his way with both relics.

Now at an unusual time a great cloud gathered spreading  
 herself forth. With her hollow rumbling she increased the roll  
 of the drums and with the bright bouquet of the rainbow she

adorned the space of the heavens. She made lustrous lightning quiver on all sides, an instructress for the dance begun by the peacocks. Together with the dust raised by the hoof-beat of the horses she made the wreath of the sun's rays disappear and veiled the whole firmament in thick darkness. When the dignitaries saw all this they thought again and again: she will pour forth violent rain to disturb the high festival, and their hearts filled with sore trouble, they betook themselves to the all-wise Ruler and considered what was to be done.

と見える。これはパラッカマバーフエ王（在位一一五三―一一八六）の時代における仏歯供養の様子を記したものである。これによれば、王はあらゆる限りの装身具を身に着け、黄金で飾ったお気に入り象に乗り、多くの僧たちも馬に乗って王とともに行進し、仏歯精舎へ仏鉢精舎へと向かった。王は両手を額の上に組み見事な作法で礼拝し、自ら二つの舍利に良い香りの花を献じた。その時、厚い雲が集まり雷鳴がどどろき、虹が空にかかった。高僧たちは雨が降り祭典が混乱する<sup>ハッパ</sup>を案じたといふ。

また、同書 87-1-13 には次のように見える。

Now once upon a time when through the influence of evil planets a great heat arose in Lankā by which everything was burnt up, when the corn withered and a famine was inevitable and the whole of the people dwelling in Lankā were filled with the greatest anxiety, the King gave orders for a splendid festival to be held for the three (sacred) objects, for the cetiyas and the boghi trees and for the protectors Metteya and other miracle-

working highest deities, who were to be venerated by various offerings, and even to turn the whole of Lankā into one great festival. After antecedent sacrificial ceremonies, he gathered together the Great community of the bhikkus, caused them recite the Paritta and bear the Tooth Relic of the Great sage round the town in fitting manner, the right side turned towards it, and made (in firm faith) the resolve: the heavens shall rain. Thereupon great clouds gathered on every side, flashing with lightning and again and again thundering, so that it was bliss for the ears of all people, and they began to rain, destroying the glowing heat, making joyful the people, driving away the famine, beautifying the country and reviving the corn.

“By the power of the Buddha do these rain-clouds pour forth such rain, making joyful our hearts. Who therefore among gods, brahmas and men is capable of understanding how great are these excellent qualities of the Buddha? But our King also is mighty and strong in miraculous power, a king like to him there has not been and there will not be.” With such words ever and again repeated, the dwellers in Lankā praised the excellence of the Monarch of sages and also the excellence of their King.

これはパラッカマバーフエ二世（在位一一三六―一一七〇）の時代の話である。スリランカが連星により暑くなり全てが焼け穀物が萎れ、飢饉が避けられず人々が不安にかられると、王は三聖遺物を祀る祭典を行うように命じ、神々に奉納品を納めた。さらに王は仏歯を引き出して街を巡り、仏歯の周囲を右遶した。ただちにあらゆる

方向より厚い雲が集まり、稲妻が何度も光り、それを耳にした人々は無上の喜びを感じた。雨は人々に喜びをもたらし、熱を下げ飢饉を追い払い、国土は美しく甦り穀物を復活させたという。

この二つの記録は、仏歯を供養することによって降雨がもたらされるという信仰があったことを伝えている。ただし、これは十二〜十三世紀の逸話であり、アヌラーダプラ時代（紀元前四世紀〜紀元後八世紀）においては仏歯供養と降雨とは関係ないと考える説もある<sup>(11)</sup>。

しかし、先に挙げた五世紀に撰述された『高僧法顕伝』には、スリランカに仏歯が来てからはこの国に飢饉と荒廃がなくなったと記されている。また、仏歯が請来される以前の話であるが、ガボーディ王（在位二五一〜二五三）は日照りの時に舍利を祀るマハートゥーパに行き、庭内の地面に伏して天が雨を降らし水が自分の身体を浮かせるまで立ち上がらないと宣言し、天はそれに応えて雨を降らせたという（MAHAVAMSA 36-73-79）。記録にはアヌラーダプラ時代のスリランカにおいて仏歯供養の後に雨が降ったと伝える記録は見えないとしても、仏歯が飢饉から人々を救い豊かさをもたらすという信仰があったことは認めて良いであろう。

ここで仏歯供養と後七日御修法とを比較し、両者の共通点をまとめると、

①年に一度寺から宮中（もしくは王宮近くの寺院）に運ばれ供養される。

②仏歯と舍利が保管される場所は塔ではなく建物である。

③供養によって国が平安となり五穀豊穡となる。

スリランカの仏歯供養は王が供養の主事者となり、自ら仏歯を王宮の精舎に迎えるという姿勢を見せている。では、後七日御修法に

おける天皇の主体性はどうか。後七日御修法は十一世紀の頃より玉体安康が主たる目的に加わるようになる。しかし、空海が始めた時点では、これは目的に含まれていなかった<sup>(12)</sup>。このことは天皇が舍利を宮中に迎えて供養し、国家と国民の平安のために祈願することが、後七日御修法本来の姿であったことを示している。この点も仏歯供養と共通する。

後七日御修法は、約三十年に一度行われた法門寺舍利供養よりもスリランカの仏歯供養により近似していると言及することができるが、空海が唐において継承した教学に仏歯供養に関する情報が直接入った可能性があれば、この仮説はかなり現実味を帯びて来るであろう。この問題を考える際、金剛智と不空がスリランカに渡り仏歯を拝していることが注目される。

## (2) 金剛智・不空の仏歯拝見

『貞元新定釈経目録』（大正蔵五五―八七五中）に、スリランカにおける金剛智（六七―七四一）の行動が記されている。

（前略）国南近海有観自在菩薩寺。門側有尼拘陀樹。先已枯頽。和上七日断食行道。樹再滋茂。菩薩応現而作是言。汝之所學今已成就。可下往三師子国。瞻礼仏牙。登楞伽山。礼拝仏跡。廻来可下往三中国。礼謁文殊師利菩薩。彼国於汝有縁。宜往伝教济度群生。聞是語已不勝忻慰。僧徒咸聞其語。寺衆乃曰。若菩薩降臨尼拘陀樹。枝葉滋荣。去即枯頽。以此為候三三七日。却廻辞其国王。将領弟子道俗八人。往三師子国。到楞伽城。王臣四衆以諸香花迎礼和上。至其宮側復往無畏王寺。頂礼仏牙。持諸香花。精誠供養。

遂感<sup>二</sup>仏牙放光空中成蓋普現<sup>一</sup>。大衆咸觀<sup>二</sup>斯瑞<sup>一</sup>。便住<sup>二</sup>其寺<sup>一</sup>

半年供養遂詣<sup>二</sup>東南<sup>一</sup>往<sup>二</sup>楞伽山<sup>一</sup>。(後略)

金剛智は南インドの補陀落山で修行していた時、観音菩薩より師子国(スリランカ)に行き仏歯を拝し、楞伽山に登り、仏跡を礼拝するようにとのお告げを受けた。そこで弟子八人とともにスリランカに渡り、仏歯や仏跡を拝し、約一年間この島に滞在した。金剛智が仏歯を拝見したのは無畏山精舎においてであり、金剛智が香花を以て供養したところ仏歯は放光し、奇瑞を現したといい、金剛智はこの精舎に半年間滞在したという。仏歯を拝見した場所が仏歯精舎ではなく無畏山精舎であったことは、金剛智が訪れた時まさに仏歯が無畏山精舎に奉迎されていた最中であつたことを物語っている。したがって、金剛智は仏歯供養の儀式の詳細を直に見る機会に恵まれたことになる。金剛智は南インドに戻った後入唐の意思を固めるが、唐へは海路をたどり、その行程でスリランカを再訪している。

一方、『大唐故大德贈司空大弁正広智不空三藏行状』(大正蔵五〇―二九三上)によれば、不空もスリランカに渡っている。不空は王に迎えられ、王宮において七日間供養を受けた。空海撰とされる『秘密曼荼羅教付法伝』<sup>(13)</sup>には、王宮の供養の後で王は不空を仏歯精舎に住まわせたと見える。

以上見てきたように、金剛智と不空はスリランカに渡り、仏歯が置かれた精舎に滞在した。しかも、金剛智は仏歯供養の最中に無畏山精舎に滞在し、供養の様子を逐一見ていた可能性がある。両者が仏歯供養の次第や教義、効験などについての知識を得たであろうことは想像に難くない。二人がスリランカで学んだ仏歯供養の情報は、恵果に伝えられ、やがて空海へと継承されたのではなからうか。後

七日御修法が法門寺舍利供養よりもスリランカの仏歯供養に近いことは、このような事情に起因するのではなからうか。

### 終わりに

以上、後七日御修法をめぐる空海の舍利信仰の源流について考察を試みた。そして、唐において空海は恵果より法門寺舎利の奉迎に関する教義を伝授され、帰国後に舍利法を行うべく仏舎利八十粒を相承し、また舍利を籠めた法具類を揃えたことを指摘した。さらに、後七日御修法には法門寺舍利供養とは違う要素―毎年の舍利奉迎や舍利を塔以外の建物に安置すること―が認められ、これはスリランカの仏歯供養に近い要素であると論じた。仏歯供養に関する情報は、金剛智と不空が現地で得た知識が恵果を介して空海に伝えられたものであると推測した。

以上の推測が許されれば、後七日御修法はスリランカの仏歯供養と唐の法門寺舍利供養という二つの法要の要素を受け継いでいることになる。王権と舍利との結びつきは、釈迦入滅直後に古代インドの八国の王が舍利を分ける分舍利から始まり、さらに八万四千基の舍利塔を建立したとされるアショーカ王に継承される。王が舍利を迎え、供養するという八国王やアショーカ王以来のスタイルは、スリランカの仏歯供養、法門寺舍利供養、そして後七日御修法へとたどることができるといえる。まさに後七日御修法はわが国舍利信仰という枠にとらわれない、世界的な広がりを持つ舍利信仰であると言つて良いであろう。

〔注〕

- (1) 内藤栄『舍利莊嚴美術の研究』第一部1「後七日御修法にみる舍利觀について」(平成二十二年三月、青史出版)
- (2) 『貞元新定釈教目録』卷第十四金剛智伝(大正蔵五五―八七五中)  
(前略) 經三年一至三十一。往南天竺。於龍樹菩薩弟子龍智年七  
百歲今猶見在。經三十七年承事供養。受學金剛頂瑜伽經及毘盧遮那總  
持陀羅尼法門諸大乘經典并五明論。受五部灌頂諸仏秘要之藏。無  
不通達。遂辭師龍智。却還中天。 (後略)
- (3) 関根俊一『金剛鈴と金剛杵』三七頁(『日本の美術』第五四一、平成二  
十三年六月、ぎょうせい)
- (4) 『陀羅尼集經』卷二「仏説跋折羅功德法相品」(大正蔵一八―八〇三)  
(前略) 爾時金剛藏菩薩。忽從頂上涌出三股跋折羅形。如金光  
色。當出之時。大千世界六種震動。現坐鬼神一時崩倒。仏語鬼神  
汝等莫怕。我金剛藏。有如如是等神通自在大威力。故涌出如  
此難測之相。以此當助護我正法。我今印可。仍以過去真仏舍利  
七粒。付屬菩薩。令其舍利隱在其中。將為實信。識相護持。  
防諸外道欲界天魔心生輕慢。因即称名摩訶跋折羅。是故常能威  
侍我側。拒諸魔事。既有利益。亦願有人持我法者。及持  
中菩薩金剛天等陀羅尼法上。皆須具足如法之相。而常擬備。現座大  
衆皆言稱善。(後略)
- (5) 内藤栄『舍利莊嚴美術の研究』四二頁(注1)
- (6) 内藤栄『舍利莊嚴美術の研究』一九八頁(注1)
- (7) 『法苑珠林』卷三十八(大正蔵五三―五八六上)  
(前略) 至貞觀五年。岐州刺史張亮素有信向。來寺禮拜。但見故塔  
基。曾無上覆。奏勅請望雲宮殿以蓋塔基。下詔許之。古老伝  
云。此塔一閉經三十年。一出示人。令道俗生善。恐開聚衆不  
敢私開。奏勅許開。深一丈余。獲古碑。並周魏之所樹也。既  
出舍利。遍示道俗。有二盲人。積年目冥。怒眼直視忽然明淨。京  
邑内外奔赴塔所。日有数万。(後略)
- (8) 『大唐故大德贈司空大弁正広智不空三藏行狀』(大正蔵五〇―二九三  
中)  
(前略) 至德中。鑾駕在靈武風翔。大師常密使人問道。奉表起  
居。又頻論剋復之策。肅宗皇帝。亦頻密謀使者。到大師處。求秘密  
法。并定取京之日。果如所料。乾元中。帝授轉輪王七宝灌頂。

〔後略〕

- (9) 『仏祖統記』卷第四〇(大正蔵四九―三七六上)  
(前略) 詔迎鳳翔法門寺仏骨。入禁中立道場。命沙門朝夕讚禮。  
(後略)
- (10) 『大唐聖朝無憂王寺大聖真身宝塔碑銘』  
(前略) 貞元初五月十日。勅僧法澄。中使宋合礼。府尹崔光遠。啓  
發迎赴内道場。聖躰臨筵。昼夜苦行。從正性之路。入甚之門。(後  
略)
- (11) 藪内聡子『古代中世スリランカの王権と佛教』九三頁(平成二十一年  
二月、山喜房佛書林)
- (12) 斎木涼子『後七日御修法と「玉体安穩」―十一・十二世紀における展  
開―』(『南都佛教』第九十号、平成十九年十二月、東大寺図書館發  
行)
- (13) 『秘密曼荼羅教付法伝』(『弘法大師全集』一一二〇)  
(前略) 到師子国。国王郊迎宮中七日供養。以真金器沐浴和上。  
肘步問安以存梵礼。王諸眷属宰輔大臣備尽虔敬。便令安置於  
仏牙寺。即奉遇龍智阿闍梨肘行膝步從而問津。(後略)

〔付記〕

筆者はメトロポリタン東洋美術研究センターより平成二十三年度の  
研究助成を受けている。本稿はその成果の一部である。ここに厚く  
感謝申し上げる次第である。

九号(表紙写真解説) 十月

・『第六十八回 正倉院展』特別展図録(作品解説) 奈良国立博物館 十月

・「雲鳥背円鏡」(天平の至宝) 作品解説) 読売新聞社朝刊 十月三十日

・「四点の刀剣展示」(奈良博手帖) 読売新聞社朝刊 十二月十三日

②調査・講演・教育等

・「八世紀の鏡」(サンデートーク) 於…奈良国立博物館講堂 二月二十一日

・「正倉院展親子鑑賞会」 於…奈良国立博物館講堂 十月二十三日

・奈良トライアングルミュージアムズ東京セミナー「冬の奈良と奈良国立博物館の楽しみ―工芸品を中心に―」 於…奈良まほろば館 十二月四日

③その他

・メトロポリタン東洋美術研究センター研究助成「八世紀に制作された鏡の画像の意味―法隆寺献納宝物海磯鏡を中心に―平成二十八年度

## 堀内 しきぶ (企画室研究員・国際交流担当)

①執筆物

・「三か国語の音声案内」(奈良博手帖) 読売新聞朝刊 四月十二日

③その他

・ ICOMミラノ大会視察 七月三日～十一日

・ 2019 ICOM京都大会 COMCOL連絡担当者

奈良国立博物館研究紀要

## 鹿園雑集

第十九号

平成二十九年七月三十一日発行

編集発行 奈良国立博物館

〒六三〇・八二二三

奈良市登大路町五〇番地

印刷・製本

株式会社天理時報社  
天理市稲葉町八〇番地

# SOURCES OF KŪKAI'S FAITH IN THE RELICS OF THE BUDDHA: THE LATTER SEVEN-DAY RITE AND OFFERING SERVICE OF THE BUDDHA'S TOOTH RELIC IN SRI LANKA

NAITO SAKAE, Nara National Museum

In the twelfth month of first year of the Jōwa era (834) during the early Heian period, Kōbō Daishi, Kūkai, proposed to the emperor that a new ritual be performed in the palace. This ritual, which was to be performed annually in the first month thereafter, lasted for a period of seven days and involved bringing Buddhist paintings, ritual implements and relics from Tōji temple to the palace. The rite was called the Goshichinichi no mishiho (August Secret Ritual of the Latter Seven Days). The purpose of the rite was to insure the protection of the nation (*kokka goji*) and the successful harvest of the five grains (*gokoku jōju*). The relics used in the Goshichinichi no mishiho rite were those that Kūkai had inherited from his master Huiguo (Jpn. Keika) in Tang China. They had originally been obtained in Southern India by Vajrabodhi (Jpn. Kongōchi), the master of Bukong (Jpn. Fukū) who was Huiguo's master. Faith in the relics employed in the Goshichinichi no mishiho differed greatly from that during the Nara period, as 1) the relics were not placed inside a stupa but preserved in a building, 2) they were transported to the palace each year, and 3) the relics were thought to have magical properties. This article seeks to demonstrate the sources of Kūkai's faith in the relics of the Buddha, and the most direct model is the offering ceremony of relics from Famensi temple (Jpn. Hōmonji) that was held in the Tang palace once every thirty years and the annual relic offering service for the Buddha's tooth at the palace in Sri Lanka. Huiguo had in fact participated in the offering rite for the relics of Famensi and Vajrabodhi and Bukong had both visited Sri Lanka so it is highly likely that they witnessed the offering rite of the Buddha's tooth. In both cases, the miraculous efficacy of the rite was thought to protect the state and assure abundant harvests of the five grains and thus the contents of these rites were very similar to that of the Goshichinichi no mishiho. Kūkai's faith in relics, which was unprecedented in Japan, thus had international links.